



手探りの国際化の中で

—地球規模での知識の共有を目指して—

私は、かねがね国際化というのは異質なものの共存と協力ということだと思っている。それには、個が確立していなければ協力もできないし、共存も成立しない。そして、協力と共存を“運用”していくには、相互理解に基づく日常的な関係と信頼を保つことが欠くことのできない要素だと思っている。時に、私の近辺で最近経験しているいくつかの例をあげることを許していただきたい。

第一に、一口に地球は狭くなったといわれるが、コンピュータネットワークは我々に新しい時代をもたらした。Wide Internet を介して自分の研究室のマシンから遠くはなれた海外のマシンを呼び出したり、分単位秒単位のオーダーで緊密に連絡をとりあうことができるようになった。この情報交換の即時性は、すでに我々にボーダレスの世界を与えてくれる。

この構造がなければ、太平洋のこちら側から ANSI X 3 J 13 Common Lisp の規格原案の作成に正員として携わることなど現実性がなかった。また、分散環境で動作するソフトウェアがこうした地球規模のネットワークの中で知識、データベースを共有する形態が現実味をおびだしている。

第二に、ヨーロッパ、USA、日本という三極構造の中で、日本ではどう思うか、日本はどうするのか、あるいは、日本はどうかかわってくれるのか、という問いかけが現実になげかけられるようになった。いわば、世界の中でリーダーシップを問われるようになった。それは必ずしも日本独自の立場を主張するべき場合ばかりではない。また、日米間を基軸にするのであろうが、EC 諸国との関連の強化は、私にとっては今始まったばかりの課題である。

イギリスからは、日本でどのように Common Lisp の活動を進めたのか聞かせて欲しいという依頼がきた。フランスからは、米国とのつき合い方について個人的な経験を聞かせて欲しいという依頼がきた。文字通り、手探りで対応していきたいと思っている。

第三に、AI 技術の、諸外国、特にアジア、中近東、中南米、アフリカへの教育/技術指導という問題である。これも現実に体験するようになった。ODA まわりの問題でもあり、また、研究者として身近に生じる交流の問題でもある。CICC での指導を体験した範囲では、日本への期待は高く、やれることは多いことに気づかされる。同時に、それらを通じてこちらが学ばされることも多い。

これらのことから強く思うのは、究極的には人類の英知を蓄積し、多くの人と共有する仕組みの必要性である。相互理解と交流があれば戦争も起こらないともいうが、相互の情報共通化/共有化はそれを進める第一歩であると思ったりもしている。そして、それはパラ色ばかりとはいえないが、現実的な夢である時代となってきた。

さきやかな試みとして、(財)機械振興協会の委託事業の一つとして、AI 財団において共通知識ベース委員会をはじめ、三年目に入る所となった。私の夢は、こうした試みが国際的な視野に立ったものに発展していくことである。それには、まだまだわからないことが多い。一步一步進んでいきたい。

財団法人 国際AI財団

共通知識ベース委員会 委員長

井田昌之

Masayuki IDA

青山学院大学 助教授